

天才音楽家とガールズバンドのハチャメチャな日常

ポテト・ポテト・ポテト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天才音楽家兼モデルである高校生、湊春音とガールズバンドが織り成すハチャメチャでちよっぴり青春の物語である。

目次

第1話	勧誘と遭遇	前編	1
第2話	勧誘と遭遇	後編	5
第3話	オフ	前編	10
第4話	オフ	後編	14
第5話	本屋と図書室	前編	17
第6話	本屋と図書室	後編	20
第7話	聖墮天使のツインテール		24
第8話	事務所の仲間達		29

第1話 勧誘と遭遇 前編

「ああもう一生ここから動きたくないよ」

「春音、ふざけたことを言わないで。今から私とメンバー集めに行くのよ」

「嫌だ!というかなんで僕まで行かなきゃいけないんだ?」

「それは……あれよ!ええ、あれよ」

「いやあれってなんだよお!」

僕は今従姉の友希那に貴重な休日を潰されかけている。

ただでさえ僕は忙しいってのになんで貴重な休日を潰されることになるのか。

「早く着替えなさい。ジャージ姿でライブハウスは目立ってしまうわ」

「行かないから着替えない」

友希那が何と言おうと僕は絶対に行かないぞ!

友希那が僕のジャージのズボンを脱がそうと手をかけてきた。

「って何やってるんだよ!いきなり人のズボンを下ろすな!」

「小さい頃はよく一緒に着替えてたじゃない」

「いつの話だよ!」

一体いつの話を持ち出して来るんだよ。

一緒に着替えてた頃って幼稚園の頃位だろ。

「それもそうね」

どうやら分かってくれたようだ。

流石にこの年頃ではおかしなことだとわかったみたいだ。

「確かに春音も昔と比べるとかなり大きくなったわね。昔は私とあまり変わらなかったのに」

「そうになると友希那も大きく……はなってるいな」

さっつきまでの反撃に友希那のとある場所を見つめながら言った。

すると友希那の目付きが変わった。

「伯母さんに言いつけるわよ」

「すみませんでした!」

すぐさま土下座。

流石に母さんに言いつけられるのはまずい。

キレた母さんはうちの学校の鬼の風紀委員なんて目じゃない位怖い。

そして結局母さんに言いつけるといふ最強の脅し文句で僕は家から引き剥がされた。

はあ……もつとソファに寝そべって録画してたドラマ見たかったのに。

知り合いが出てるから見たかったのに。

結局ライブハウスに連れて来られた僕は友希那と二人でライブを見ている。

正直こんなライブハウスに本当に友希那が認めるような奴はいるのか？

全くそうは思えないな。

内心早く帰りたいと思いつつながら最後のバンドが登場した。

なんかギターの人の見覚えがある。

誰だっけ？

ああ、思い出した。

めちやくちや美人なのに性格がキツすぎることで有名な風紀委員の……あれ？名前思い出せない。まあ鬼でいいか。

実際鬼のなんとかって言われてるもんな。

それにしても今日来たことに意味はあったみたいだ。

この鬼（仮）、今日演奏したメンバーの中でもレベルが段違いだ。まるで次元が違う。

セックションしたくなってきた。

多分友希那のお目当てのギタリストってこの鬼（仮）だろう。

「友希那、勧誘行くか？」

「春音も気に入ったのね。行きましょう」

「オーケー」

さてと、鬼退治ならぬ鬼の勧誘にでも行きますか。

僕達は控え室に向かって行くと、中から怒号が聞こえてきた。

バンドじゃあ喧嘩なんてよくあるだろう。
知ったことじゃあない。

どうやら喧嘩が終わったみたいで数人控え室から怒った様子で出てきた。

これでようやく僕達も勧誘ができる。

「友希那、僕はカフェテリアでお茶でもしながら待ってるよ」

「ええ、分かったわ。絶対先に帰っちゃダメよ」

「分かってるって」

「いつも勝手に帰るから言ってるのよ」

「そうだっけ？まあいいや」

「良くない！」

どうやら友希那がご立腹だ。

さてと、切り札が切られる前に逃げよう。

逃げるが勝ちって言うしな。

カフェテリアでアイステイでも飲もう。

僕は今カフェテリアでアイステイを飲んでる。

そして前には何故か、知り合いが座っている。

「どうして君がいるんだ？千聖」

「ここに春音がいると思っただからよ」

「僕は一人になりたかったんだけどな」

「別にいいじゃない。私と春音の仲なんだし」

「僕達の仲って言っても知り合ったの最近だろ」

「あら？そうだったかしら？てつきり私達は前世からの繋がりがあ

ると思っただわ」

「おいおい、スピリチュアルだなあ。千聖らしくない」

「ふふっ、冗談よ」

「だろうな」

千聖は僕の知り合いで、先ほど録画していたドラマに出てる知り合い、というのも千聖のことだ。

その後もお互いに少し話していると、そろそろ向こうも勧誘が終わっている頃であろう時間になっていた。

僕は千聖と別れて友希那のもとに向かった。

第2話 勧誘と遭遇 後編

僕はカフェテリアで適当に時間を潰した後、友希那の勧誘が終わった頃だろうと思って控え室に向かった。

控え室には友希那とさっきのバンドのギタリストの二人が話していた。

「どうやら、勧誘はうまくいったようだ。」

「友希那、ようやくメンバーが一人集まったな」

「ヒヤッ!……って春音、驚かさないでくれるかしら?」

「友希那が勝手に驚いてるだけだろ」

僕達はいつもの調子で話している中、一人置き去りになっているギタリストが驚いた様子で口を開いた。

「湊さん!」

「はい、湊ですけど」

「そういえば二人とも湊さんでしたね。それじゃあ春音さん! どうして貴方がここに居るのですか?」

「どうやら彼女は僕のことを知っていたようだ。」

「友希那に連行されて……って痛いつて! ちよつ友希那? 足踏まないで!」

なぜ僕が友希那に足を踏まれるのだろうか。

というかめちやくちや痛い。

昨日ダンスに足ぶつけて小指の爪割れてるのにそこピンポイントで踏まれるとめちやくちや痛い。

「大体わかりました。春音さん、貴方どうせいっものように遅くまで寝てたんじゃないですか?」

「いつものようにってどうして分かるんだ?」

「だって貴方いつも遅刻ギリギリで学校に来るじゃないですか」

「風紀委員か! あんたはいつも校門の前に立ってる風紀委員か!」

「そうですけど」

このギタリスト改め風紀委員、どうやら僕の予想通りうちの学校の風紀委員の鬼のなんとからしい。

「では私はこれで。さようなら」

「ええ、さようなら」

「じゃあね〜」

風紀委員は控え室を出て帰っていった。

さてと、僕も帰りますか。

「それじゃあ僕も帰るよ」

すると腕を掴まれた。

なんか今日の友希那、機嫌悪くない？

「友希那、今日機嫌悪くない？」

「春音がいちいち変な事ばかりするからよ」

「僕なんかやっただっけ？」

「はあ、相変わらずね」

え？どうして僕呆れられてるの？

まあいいや。あとでチャットで友希那に猫の画像送れば機嫌も直るだろう。

あいにく、僕には取っておきの画像があるんだ。

これを見せれば一週間ほど、友希那に何言っても怒られないし母さんにも言いつけられないだろう。

「その、春音……今夜家に泊まってもいいかしら？」

「ダメ」

友希那のお願いを速攻で却下すると友希那は少し悲しそうな顔をした。

まあ冗談なので速攻取り消すが。

「まあ冗談だけど。別に泊まってもいいよ」

「ありがとう、春音。それじゃあ行きましょう」

「おいおい待てよ友希那」

僕は先に出ていった友希那を追いかけ、外に出る。

どうせ伯父さんとケンカでもしたんだろう。

あえて触れないでおこう。

伯父さんも友希那も不器用だからなあ。

まったく、世話の焼ける親子だな。

今度伯父さんに何か買って貰おう。

貸し一つって所だ。

「友希那、何食べたい？」

「何でもいいわ」

「オーケー、じゃあゴーヤチャンプルで」

「やめて！」

「分かってるって」

僕達は僕の家に戻ってきて夕食の準備をしている。

友希那はソファに座ってテレビを見ている。

猫の特集が放送している。

それと友希那弄るの楽しいなあ。

反応が毎回面白い。

弄り甲斐のある反応なのでつい弄ってしまう。

とりあえず、冷蔵庫にあるもので適当に作っておこう。

ある程度の物なら文句は出ない筈だ。

「友希那、出来たぞ」

「春音！見てみて！にゃーんちゃんか！にゃーんちゃんか！」

友希那が幼児体型……じゃなく幼児退行している。

昔に戻ったみたいで何かいいな。

「確かに可愛いな。これは癒される」

「でしょう！」

「さてと、食べるか」

「そうね」

僕達は夕食を食べ始める。

そして夕食を食べ終え、片付けをしながら友希那と話している。

「友希那、風呂先に入っていていいよ」

「わかったわ。でも……着替えどうしようかしら」

「僕のジャージ適当に着とけば？いっぱいあるし」

「そうさせてもらうわ」

やっぱりジャージっていいよな。

こうして人に貸しても違和感がない。

僕は洗い物を終えてのんびりスマホを弄っている。
数分すると友希那がジャージ姿で出てきた。

「さてと、僕も風呂に入りますか」

男の風呂など誰も興味がないと思うので割愛させて頂く。

僕もジャージ姿でリビングに戻る。

友希那がこちらに気がついたのか、こっちに歩いてきた。

「春音、さっき携帯が鳴っていたわよ」

「おう、サンキュー」

どれどれ、誰からだ？

僕はスマホを開いてメールを確認する。

うん、見なかったことにしよう。

千聖からのメールだったのだが、一つ問題がある。

ハート多くない？

これって友人に送るメールに必要なのか？

このハートの量は恋人にも送らないだろう。

怖くなってきたので無視しよう。

それと着信が一件。

事務所からだ。

これは掛け直そう。

僕はすぐさま事務所に電話をする。

「ああ、春音君かい？明日の撮影だけど向こうの人が急用で無しになるんだ。じゃあ、オフをごゆっくり」

「わかりました」

明日も休みか。

珍しいな。休日を2日丸々休めるなんて。

僕はモデルの仕事をしている。

それと作曲家として事務所のアイドルグループなどに曲も提供している。なのでかなり忙しい。千聖と知り合ったのも事務所であつたまま同じ仕事があつたから、というわけだ。

今日はもう眠い。

寝るか。

「友希那、僕は先に寝てるから」
僕は一足先に寝室に向かった。
そして眠りについた。
翌朝。

僕の隣には寝ている友希那が。
「何で友希那がそこに!?!」

第3話 オフ 前編

朝目覚めると隣に友希那が寝ていた。
何故だ？

とりあえず状況が飲み込めない。
友希那を起こして訊ねるにしても気持ち良さそうに眠っているのに起こすのは酷なものだろう。

今思ったけど、改めて友希那って美少女だよな。
さぞモテるんだろうなあ。

でも友希那の事だから一切相手にしてなさそう。

どうでもいいことを考えていると友希那が目を見ました。

「あら、春音。どうして同じベッドに居るのかしら？」

「こっちのセリフだよ！どうして僕のベッドに友希那がいるんだよ！
ベッドなら隣の部屋にあっただろ」

「そうなの？」

「このポンコツ」

「言いつけるわよ？」

「すみませんでした！」

手のひら返しとはまさにこの事だ。

僕が友希那に攻撃しても友希那には切り札がある。

「とりあえず朝食作るから友希那は先に着替えてて」

「わかったわ」

そう言つて友希那はいきなり服を脱ぎ始めた。
ってストップストップ！

「ちよっ友希那!?まだ僕いるから！」

「そうね。それじゃあ早く行ってくれないかしら」

「わかったよ。僕もまな板には興味がないからね」

「言いつけるわよ？」

「すみませんでした！つい本音が」

「今回は許さないわ」

どうしよう。

本音言っちゃったよ。

僕って何か一言多いんだよなあ。

まあ、朝食に友希那の好きなハチミツティーを出してそれから猫の画像と動画でなんとかなるだろう。

友希那はチョロいからな。

「友希那、出来たぞ」

「わかったわ」

少し不機嫌そうに友希那は言って、リビングに出てきた。

友希那の好きなものを出してあげれば喜ぶだろう。

「あら、このハチミツティー、美味しいわね」

「そうか。それはよかった。それとこれを見てくれ」

「これは……にゃーんちゃんじゃない！こんな画像どこで拾ったのよ！」

僕が見せたのはこの前テレビ番組の収録で地方に行った際に偶然見かけた写真だ。

この切り札を使う時が来るとは。

「春音、さっきの発言は許してあげるわ」

「ありがとな、友希那」

どうやら切り札を切った甲斐があったみたいだ。

許して貰えたみたいだ。

僕達は朝食を食べ終え、少しゆっくりしていた。

「私はもう帰るわ」

「おう。今の時間だと伯父さんも家に居なさそうだからな」

「そうね。春音、昨日は泊めてくれてありがとうね」

「いやいや、全然いいよ。いっつも一人だとさみしいしね」

「それじゃあ」

「また今度な、友希那」

こうして、友希那は家に帰っていった。

さてと、今日1日オフだし録画してあるドラマでも見るか。

僕はテレビを点けてドラマを見始める。

それから1時間がたち、ちょうど1話が終わったあたりで電話がか

かっってきた。

千聖からだ。

「もしもし、どなたでしょうか」

「私よ」

「人違いです」

よし、これで僕のオフを乱すものは誰も居ない。
するとピンポンとインターホンが鳴り響く。

「つたく、誰だ？」

見てみると千聖だった。

満面の笑みを浮かべている。

ただし目が笑っていない。

ヤバイ。

居留守しよ。

僕はリビングに戻ってテレビを切る。

そしてソファで寝転がる。

そしてまたインターホンが鳴り響く。

千聖、もう我慢できない。

僕はドアを開けた。

すると千聖が口を開いた。

「春音、これはどういう事かしら？」

「ええっと、これはですね？深い深い訳がありまして……」

「何かしら？その内容次第ではどうなるか分かってるわよね？」

場所は変わってリビングにて。

千聖の訪問から2時間が過ぎた頃、僕はリビングで正座させられて
長いお説教を食らっていた。

「わかったわね？」

「はい。わかりました」

「それじゃあお詫びに、といつてもあれだけど今日1日私に付き合っ
てくれないかしら？」

「かしこまりました」

はあ、ろくな目に会わないなあ。僕。

またオフを潰されるのか。

オフとはいったい……

僕は着替えて玄関で待つ千聖の所へ向かった。

「お待たせ、千聖」

「春音、ひとまず花音がいつものところで待っているから、行きまじょうか」

「ういーっす」

待ち合わせままでしてやがったのか。

やれやれだぜ。

どうやら、僕のオフは仕事よりも疲れるらしい。

第4話 オフ 後編

今日は千聖に連行されて潰れる事となった僕のオフ。

俺達はとりあえず待ち合わせ場所の喫茶店に向かっている。

歩いていると千聖が腕を絡ませて来た。

「何やってるんだ？千聖。誰かに見られたら不味いんじゃないか？」

「変装してるから大丈夫よ」

「変装ってその髪型か？」

「ええ。人って髪型一つでかなり変わるのよ？」

今の千聖の髪型はいつもと少し違っていてパット見だとテレビで見る千聖とは大きく変わる。

人は髪型一つで大きく印象が変わる。

僕もプライベートとモデルやテレビの仕事の時では髪型が違う。

これ一つで街中でも気づかれない。

「ああ、知ってるよ。僕もそうだからね」

こうやって話していると、喫茶店に到着した。

中には花音が座っていた。

「花音、お待たせ」

「千聖ちゃん、春音君無事に連れて来れたんだね」

「無事ってなんだよ！まるで僕が千聖に何かするみたいじゃないか」

「私は別に春音にならされてもいいのよ？」

「いやいや、僕はまな板に興味は無いから」

また言っちゃったよ。

千聖がニコニコしてる。

わりい、僕死んだ。

「春音、言い残すことはあるかしら？」

「ジヨ、ジヨークだから……」

「春音君、向こうでも頑張ってるね？」

オオ……

花音、お前もか……

「まあ、今回は許してあげるわ。でも、次はないわよ」

「肝に銘じておきます」

先ほど頼んでおいたミルクティーが運ばれてきた。

茶髪のウエイトレスの子、可愛いな。

「春音、つぐみちゃんのことやらしい目で見てたでしょ」

「見てない見てない！確かに可愛いなく、とかは思ったりもしたけど」

「まあ許すわ」

何で僕、怒られてるんだろう。

「そういえば春音君、前雑誌の表紙だったよね？」

「ああ。ここ最近表紙の回数が増える気がする」

「ようやく皆が春音のかっこよさがわかってきたのね」

ようやく僕が怒られなくなった。

最近色んな人に怒られてる気がする。

大体僕の失言 فقط。

「春音ってどんな女の子が好きなの？」

唐突だなあ、おい。

僕は黒髪ロングの清楚系美人が好きだ。

「黒髪ロング清楚系美人」

「うわ童貞……」

「うるさいなあ、全男子の憧れだろ」

「そうなの？」

「そうなんだよ」

黒髪ロングの清楚系美人は全男子の憧れだろう。

そうだよな？

その筈だ。

「じゃあ今度弟に訊いてみるね」

「それがいいわ、花音。春音ってたまに適当なこと言うから」

も、もちろん好きだよな？黒髪ロングの清楚系美人。

花音の弟も好きな筈だ。

なあ？そうだよな？

それと僕の信用のなさが悲しくなってきた。

何でだよお。

さてと、冷めないうちにミルクティーを飲むか。
うん。甘くていい感じだ。

それとケーキはどんな味だろう。

僕はケーキを少し食べてみる。

甘すぎず、それでいてちょうどいい甘さだな。

このケーキの味はなんだか安心する。

心が暖かくなる味だ。

「やっぱりこのケーキ、美味しいよね」

「確かに。優しい甘さが癖になるぜ」

「そのショートケーキ、美味しそうね。私のロールケーキ一口あげるからそのショートケーキを一つくれないかしら？」

「いいよ」

すると千聖はロールケーキを少し取って僕の口元に運んでくる。

「あーん……あれ？春音、口を開けてくれないとケーキを渡せないのだけど」

「あ、ああ。そうだな」

僕は口を開けて千聖からケーキを貰った。

うん、美味しいな。

でも、なんで千聖がフォーク見てにやけてるんだ？

ちよつと怖いな。

そのあとも長い間3人で話し続けていると、もう時間が来た。

「春音、また明日」

「春音君、またね」

「おう、またな」

僕達は解散してそれぞれの自宅に戻った。

第5話 本屋と図書室 前編

僕には、とある趣味がある。
読書だ。

僕が読書にハマるようになったのは事務所に入った頃、中学生くらいの頃だ。

僕は仕事の時、移動中にできる事を探していた。

そんな時、ある作家の本を本屋で発見し、それから本にハマったのだ。

それからのこと、僕は移動中以外でも読書をしている。

さて、土日も終わり、多くの学生にとって憂鬱なあの日がやって来た。

そう、月曜日だ。

色々な人に振り回されてあまりゆっくりしたとは言いがたいが、今日からまた学校である。

僕は今家を出て通学路を歩いている。

桜も散り、そろそろこの春入学してきた後輩達も学校に慣れてきた事だろう。

それと、さつきから二人ほどの女子生徒が僕の方をチラチラ見ては二人でヒソヒソ話している。

悪口を言われているわけでは無いが、女子のヒソヒソ話と言うのは、なんだか少し怖い。

するとその女子生徒が僕に話しかけてきた。

「湊先輩、その……写真とってもらって宜しいですか？」

「ああ、いいよ」

まあ、そう言うことだと思っただよ。

咄嗟に営業スマイルで応える。

でも、事務所も事務所だよなあ。

僕を歌手として、作曲家として契約するって言ってたのに今となつてはモデル、タレントの方を主にやらされる。

まあでも事務所のアイドルグループに曲は提供しているけど。

最近、とあるオフアアが来た。

ドラマに出演してほしい、とのことだ。

その内容が実に面白そうだ。

なんと学園ドラマの恋愛ものだ。

さらに主演が千聖だと言うのだから、さらに面白そうだ。

そうこうしていると、学校に到着した。

「あら？春音さん、今日もギリギリじゃないですか？」

「悪いな。僕、朝はなるべく寝ていたいんだ」

「本当に？まあ、そう言うことにしておきます」

どうやら僕の考えはわかってくれたみたいだ。

ファンの子達を遅くなる理由にはしたくない。

だから遅くなる理由はなるべく寝ていたい、ということにしている。

さて、教室に到着した。

教室では窓際が一番後ろ、という僕の定位置に座る。

何故か1年の頃から毎回この席ばかり引くのだ。

ラッキー、というか何なのか。

僕はTRPGをすると、クリティカルかファンブルしか出さないタイプだと思う。

こここのところファンブルしかでてない気がする。

友希那には切り札を切らされるし、千聖には強引に家連れ出されるし。

この調子だと僕にとんでもなくいいことが起こる筈だ。

そうじゃないと困る。

そして僕は午前の授業を終えて、昼休み。

僕はたくさんの女子生徒に追いかけられている。

「春音様〜！私と食べてくださ〜い！」

「だが断る！」

僕は逃げ続けて男子トイレで結局ぼっち飯となった。

と、友達居ないとかじゃないもん。

友達くらいいるから……

そして昼休みは逃げ続けて、午後の授業、少し眠ってしまったがなんとか乗り越えた。

そして放課後。

僕は今日仕事がないので図書室に行つて本を借りようかと思う。

図書室ではカウンターに誰も居なかった。

今日やってないのかな？

まあそのうち来るだろう。

そう思つて本棚の上の方にある本をとろうと手を伸ばすと、誰かがぶつかつてきた。

僕は体制が崩れ無かつたため、咄嗟に相手を支える事にした。

「大丈夫ですか？」

「すみません……私の不注意で………」
待って。

めちやくちや美人じゃん。

超絶タイプなんですけど。

ようやく、僕の生活のダイスロールでもクリティカルが出たみたいだ。

第6話 本屋と図書室 後編

ようやく最近の僕の生活にクリティカルが出たみたいだ。
待て、最近色々あって幻覚が見えているのかな？

クソツ、状況が整理出来ない。

「あの、大丈夫ですか？」

「あ、ああ。大丈夫です。こっちは全然何とも無いです」

幻覚じゃあない！

これは、現実だ。

にしてもここまで僕の好みのタイプに当てはまっている人ははじめてみた。

「じゃあ、僕は行くよ」

「じゃあ」

僕は自分の手に持っている本を見て、とあることを思い出した。

「図書室に誰かいるのか、という事だ。」

「ごめん、一ついいですか？」

「は、はい……なんででしょう？」

「図書室に司書の人か図書委員の人でも誰か居ないんですか？本を借りたいたのですが」

「すみません……図書委員の私が奥で作業をしていたばかりに……」

「いえいえ、別に大丈夫ですよ」

「どうやらこの美人（仮）が図書委員のようだ。」

「周りを見ていなかった僕が悪い。」

「仕事が終わるまで待っておこう。」

「あの……借りないんですか？」

「いえいえ、仕事が終わってからで結構です」

「すみません……すぐに終わらせますので……」

「大丈夫ですよ。お構い無く」

僕は椅子に座って本を読み始めた。

ゆったり本を読んでいればすぐ終わるだろう。

と、言うのは建前であつて。

実を言うと、こんなシチュエーション、自分から捨ててたまるか。というのが僕の本音だ。

好みのタイプの美人と静かな部屋で二人つきり、なんて美味しいシチュエーションを自ら捨てる男は居ない。

これは全ての男性が共感してくれるだろう。

さてと、僕は本を読んでおくか。

いや、止めだ。

手伝いに行こう。

「あの、僕も手伝つていいですか？」

「いえ……そんな……悪い……です」

「僕は正直言つて暇なので、これはただの自己満足ですよ。あなたが悪く思ふ必要は無いですよ。じゃあこれ、片付けておきますね」

とりあえず僕は高いところの本棚に片付けられる本を持ってその本棚に向かった。

とりあえず図書委員の人がさつきから高いところにある本棚に手を伸ばすときかなりの背伸びをしている。

見ていて危なっかしいので身長なら自信がある僕が代わりに高いところの片付けをしておこう、というわけだ。

そして、片付けが終わつた。

「その……ありがとうございます」

「いえいえ、気にしないで」

「あの……さつきから私が高いところの本を片付ける時に……体勢が危なかつたから、やってくださつたんですよね？」

「違ふよ。ただ適当に本を取つただけだよ」

鋭いな。

頭が結構切れるようだ。

それと近くで見て思ったが、彼女、ピアノをやっているだろう。手を見ればすぐにわかる。

「素直じゃ……無いんですね」

「さあね。心当たりが無い」

その後、本を借りて、家に帰った。
そして一つ後悔がある。

あの美人の名前と連絡先聞いとけばよかった！
僕としたことが、うっかりしていた。

この先人生であそこまでの人と会う機会なんてもう無いかもしれないんだぞ！

翌日。

僕は放課後、短めの撮影を終えて本屋に寄って帰ろうと思って本屋にやって来た。

お、この小説、新刊出てたんだ。

買おう。

そう思つて手を伸ばすと、誰かの手に当たった。

「すみません」

「こちらこそすみません……」

そう言ったのは昨日の美人だった。

僕は最近のファンブルの分をもう取り戻したんじゃないだろうか。

偶然過ぎる。

何ともあり得ないレベルでの偶然だろう。

2日続けて同じ人と偶然ばったり接触するなんて。

こんな事が実際に起こるのだろうか。

やっぱり幻覚が見えているのかな？

自分の頬をつねってみる。

痛い。現実だ。

「偶然、ですね」

「そうですね。あなたもこの作家さんの本、好きなんですか？」

「ということは……貴方も？」

「そうなんですよ。あれ？」

「どうしたんですか？」

「いや、あなたも僕と同じ本、他にも買うんですね」

「言われてみれば……そうですね」

彼女の手には僕が今持っている本と同じ本が数冊ある。
結構趣味が合うのかもしれない。

「僕達って、結構趣味が合うのかもしれないですね」

「そう……ですね。それじゃあ、少しお話しませんか？」

「ああ、いいですよ」

こうして、運良く美人と少しお話しする事になった。

場所は本屋の二階にあるカフェだ。

「ピーチティー一つ」

「ホットミルクを……一つ」

二人とも注文し、すぐに飲み物が出てきた。

ここのピーチティー、一度飲んで見たかったんだ。

花音曰く、ここのピーチティー、凄く香りがいいようだ。

確かに、いい香りだ。

茶葉の香りとピーチの香りがちょうど良くマッチしている。

「あの……どんな本が好きなんですか？」

「ああ、僕はだいたい、どんなジャンルでも好きだよ。恋愛小説から、

ホラー、SFにライトノベルまで何でも」

「そうなんですか。私も……そんな感じですよ」

その後も二人で結構長い間話し込んだ。

こんなに趣味の合う人は初めてだ。

「あの、連絡先……交換しませんか？」

「いいですよ」

こうして、連絡先を交換して各自自宅に向かった。

その日の夜、チャットアプリで話し込んでしまい友希那からのメールは無視してしまい電話で次の日怒られたり、学校では氷川に怒られたり、昼休みに千聖のお説教を食らうなど、つくづく僕はクリティカルかファンブルしか出さないタイプの男なんだと思った。

それと、美人、改めて白金さんは同じクラスなのだ知った。

どうしてお互いに気づかなかっただろう。

不思議だ。

さてと、今日も放課後に図書室行くか。

第7話 聖墮天使のツインテール

「ハル、朝ご飯できたよ！起きて〜！」

誰かが僕の家にいるのか？

この家に僕以外でいつでも入ることができるのは……、あいつしか居ないな。母さん曰く僕の未来のお嫁さんであるあいつだけだ。

「起きたけど、どうして君が僕の家に居るのかな？リサ」

「ハルが最近忙しいって友希那が言ってたからご飯しっかり食べてるのかな、って思ってる」

「余計なお世話だ。僕は忙しくても食事は疎かにはしないってリサが一番知ってるだろう？」

本当に余計なお世話だ。

でも、こんなバレバレな嘘を吐くってことは他に理由があるってことだろう。

「で、本当の理由は何なんだ？」

すると、リサは少し頬を赤らめて言った。

「だって、最近ハルとあんまり会えてなかったし……。で、会いたくなかったから来ちゃった」

なるほど、そういうことか。

どこかの幼児体型と違って可愛げのある理由だな。

本当にあの幼児体型はどうでもいい理由でうちに来る。

猫のDVDがみたいから、だとか伯父さんと喧嘩した、だとか。

こっちだって暇じゃないんだ。

最近、ラジオのレギュラー番組を持って仕事が少し増えた。

この番組は千聖と二人で学生からの色々なお便りを返していく番組なので、気楽といえば気楽だけど。

「なるほど。そういうえば2週間ほど会ってなかったな。まあ、詳しい話は朝ごはんを食べながらにするか。早く食べないと冷めるしな」

「そうだね」

こうして、僕とリサは食卓についていた。

その時、僕はふとりサの爪に気がついた。

「リサ、その爪どうしたんだ？ボロボロじゃないか」

「ああ、これはね、実はアタシまたベース始めたんだ」

「何！リサがまたベースを始めた、だと……」

「それでねー、友希那のバンドに入ったんだ」

「何だと……。友希那の奴、どうしてそれを僕に言わないんだ。」

「どうして友希那はそれを僕に言わないんだよ」

「このことはアタシからハルに言おうと思ってたんだ」

なるほど。そういうことか。

友希那がついに猫のかわいさに脳ミソやられたのかと思った。

「どうしてそう思ったんだ？誰が言ったとしても結局僕の耳に届くんだからわざわざリサが言う必要は無いと思うんだけど」

すると、リサは頬を膨らませて言った。

「もー！ハルは昔から察しが悪いんだから」

「良くわからないけど、謝るよ」

僕達は朝食を食べ終え、僕は録画してあるサッカーの試合でも見ようとソファに座った。

するとリサが隣に座ってきた。

「ハル、今日午後から暇？」

「ああ、特に予定は無いよ」

「それじゃあ、練習見に来てくれないかな？メンバーの皆と顔合わせといった方がいいと思うし」

確かにリサの言う通りだ。

メンバーとも早めに顔を合わせといった方が良さかもしれない。

一理ある。

「それもそうだな」

よし、これで午後からの予定が決まった。

さてさて、友希那はどんなメンバーを集めたのだろうか。

友希那が集めたからには皆一級品のスキルを持っているだろう。

そして僕がサッカーの試合を見終わる頃、ちょうどお昼の時間となった。

「リサ、昼は僕が作るよ。パスタでいい？」

「いいよ〜」

僕はすぐさま料理に取りかかる。

それから数分後、完成したパスタを持ってリサの待つ食卓に向かった。

「ハル、また料理上手くなったんじゃない?」

「まあね。そりゃあ毎日やってたら上達もするよ」

なんとなく、人に誉められるのは悪い気がしない。

そしてランチタイムを終えて、CIRCLEに向かった。

すると、見覚えのある人物が友希那の隣にいた。

「こんにちは……春音君」

「燐子、どうしてここに?」

「燐子はうちのバンドメンバーよ」

僕は燐子がここにいることを疑問に思ったが友希那の説明で納得した。

燐子の実力は折り紙つきだからな。

手を見ればわかる。

それと、一人だけ知らない小さな女の子がいた。

「ねえりんりん、知り合い?」

「うん、でも……あこちゃんも知っていると、思うよ。春音君は、有名人だから……」

この子はあこって言うのかな?

きつとそうだろう。

それからあこは首を捻って少し考えた後、閃いたかのように笑顔になった。

「あ!思い出した!最近テレビで良くみる人だ!」

「大正解だよ。まあ、テレビで見る僕とは髪型とか違うからわかりづらかったと思うけどね。名前は知ってるだろうけど、改めて。僕は湊春音。よろしく」

「よろしくお願いします!春音さん!」

「ああ、こちらこそ」

こうして、メンバーとの対面は終了して少し練習した後、僕達は

ファミレスに来ている。

「やっぱハルってすごいよね。音ちよつと聴いただけで考えてることまで分かるなんて」

「全くです。でもいきなり演奏止めてまで言われると、恥ずかしかったです」

この件については少し遡る。

まず皆に演奏をして貰ったんだ。

すると、氷川が一瞬ポテトのことを考えていることが音で分かった。

だから一度演奏を止めて僕が、

「ポテトのことを考えるな、氷川」

と言ったことが原因だ。

それから氷川の機嫌が悪い。

まあ、これについては僕も悪かったとは思う。

今度から気をつけよう。

「その件については悪かった。氷川、これからは僕も気を付けるよ」

「そうしてくれるなら、許してあげます」

ようやく氷川の機嫌が直った頃、もう結構遅い時間になっていた。

そして僕は今帰路についているのだが、

なぜか僕の住んでいるマンションとは家が逆方向であるリサが着いてきている。

「リサ、お前の家は逆方向だぞ?」

「それくらい知ってるよ?」

「じゃあどうして着いてきてるんだ?」

「だってアタシ、今日ハルの家に泊まるからね」

「聞いてないんだけど」

「ハル、携帯見てみて?」

携帯を見てもどうにもならないだろう、そう思い携帯をだすと、リサの母からメールが来ていた。

『春音君、うちのリサを頼むわね★』

「そういうことか……。しようがない。特別だぞ?」

「ハルも素直じゃないなく、嬉しいならそう言えば良いのに。あれ、ハル照れてる？」

「照れてない」

それから家に着くまで散々弄られ続けた。

そして家に着いてから少しテレビを見ながら談笑したり、交代でシャワーを浴びたりなど普通に過ごした。

ここまでは

僕は寝ようとして自室に入り、ベッドで眠りに就いた。

少しして、変な時間に目が覚めた。

すると、目の前でリサが寝ていた。

「え？」

第8話 事務所の仲間達

目覚めると、リサが隣で寝ていた。

僕は今日仕事があるので早くでなければいけない。

よって、普段なら起こさないが今日は起こす事にした。

「リサ、起きろ〜」

声を掛けたが、起きる素振りを見せない。

いや、実際にはリサは起きている。

悪戯好きなりサの事だ。

僕の反応をみたいのだろう。

いつもからかわれている分、少し反撃しよう。

「リサの寝顔、最高に可愛いな。ちよつとくらいキスしてもいいよな」
もちろんジョークである。

これを聞いてリサの耳が火を吹くほど真っ赤になっている。

完全に起きている証拠だ。

さて、期待しているリサを放置して準備しますか。

そう思つてベッドから出ると、腕を掴まれた。

「ハル、キスしないの?」

「やっぱり起きてたか。しねーよ。まさかりサ、期待してたのか?」

「別に…、してないけど…」

「嘘つて顔に書いてあるよ。ったく、小さい頃から一緒に居るんだからそれくらいわかるっての」

「やっぱりハルには分かつてたか。それじゃあ仕方ないなあ」

リサは僕の方へ歩いてきた。

気づけばリサの顔がすぐそこにあつた。

マジかよ。

僕は羞恥心に負けて目を瞑る。

すると頬に柔らかな感触があつた。

目を開けると、リサはさつきまでの反撃と言わんばかりの表情をしていた。

「まさかハル、期待してた?残念だったね、口じゃなくて」

「別に。期待なんかしてねえよ」

「それじゃあアタシ行くね。ハル今日仕事みたいだし」

「ああ。それじゃあな。リサ」

「バイバイ！へタレのハルくん♪」

そう言つて、リサは足早に帰つていった。

だが、僕は見逃してはいなかった。

リサの耳が真つ赤だったことを。

さてと、朝食でも作るか。

僕はキッチンに向かった。

それから少しして、僕の携帯が鳴った。

どうやら千聖からのメールのようだ。

内容は、もうすぐマネージャーの車でうちまで迎えに来ることだった。

そしていつものことながらハートの数が尋常じゃない。

もう慣れたので特になんとも思わないが。

千聖のメールから1時間後、マンションに一台の車が停まった。

千聖のマネージャーの車だ。

「おはよう、春音。今日はよろしくね」

「ああ、よろしく。椎名さんも、今日は乗せて頂きありがとうございます」

「いいよいいよ。ハル君なら毎日でも乗せてあげるよ！」

この人は千聖のマネージャーの椎名さん。

フランクな人で、かなり接しやすい。

ちなみに、僕のモデルデビューを推薦したのもこの人だ。

今日はラジオの収録でラジオ局まで向かう。

ラジオ局に到着し、スタジオ入りする。

それから少しして、ラジオの収録が始まった。

僕と千聖は順調に進行していき、お便りを読むコーナーになった。

「ペンネーム『春音様ガチ恋JK』さんからのお便りです。千聖ちゃんと春音様は同じ学校に通っているとのことですが、学校での春音様はどんな感じなんですか？」

またすごいペンネームだなあ。

まあ日常茶飯事なだけだ。

「学校での僕？あゝ僕的にはあんまり変わらないと思うけど」
学校でも仕事でも大して変わらない気がする。

「確かにあんまり変わらないわね。常にそんな感じだわ」

「まあ、僕はいつだって自然体だからね」

この調子で変なペンネームだらけのお便りコーナーは終わって、何事もなくラジオの収録は終了した。

「今週もお疲れ様、春音」

「千聖もお疲れ様。次千聖。パスパレのレッスンだっけ？」

「ええ。春音は？」

「僕は次の新曲の打ち合わせ」

最近タレントとしての仕事が多いが僕の本職は作曲家だ。

当然、新曲の打ち合わせもある。

「それじゃあ行き先は同じね。椎名さんが待ってるわ。事務所にいきましょ」

「そうだな。行くか」

僕達は椎名さんの車で事務所に向かった。

事務所に着いてから、打ち合わせまでまだまだあるので控え室で待つことにした。

「ハルネさくくん！」

僕が控え室に入ると、パスパレのメンバーの若宮イヴがいきなり抱きついてきた。

「久しぶり、イヴ。最近どう？」

「とても順調です！……でも、ハルネさんに会えなくて少し寂しかったです」

イヴは天使すぎる。

ガチで妹にしたい。

「そうか。それは悪かったな。お詫びと言ったらなんだが、僕に出きることはないか？」

僕がそう言うと、イヴは少し考える素振りをしてから、

「うーん。皆さんが来るまで、頭を撫でて欲しいです！」
と言った。

それじゃあお詫びじゃなくてご褒美になっちゃうじゃん、と思った
がよろこんで受ける。

僕がイヴの頭を撫でていると、控え室のドアが開いた。

「あれ、今日は春音君も来てるの？」

「ああ。そういえば教室以外で会うのは久しぶりか。彩」

控え室のドアを開けたのはクラスメイトでもある丸山彩だ。

「そうなるね。今日は何の仕事なの？」

「今日は新曲の打ち合わせだよ」

「そうなんだ。新曲、楽しみにしてるね！」

「ああ。楽しみにしててくれ。最高の曲に仕上げるから。それじゃあ

僕コンビニ行ってくるけど、欲しいものある？皆」

「特に無いわ」

「私も大丈夫です！」

「肉まんお願い！」

「分かった、彩は肉まんだな。それじゃあ行ってくる」

それから僕は事務所のすぐそこにあるコンビニに向かった。